

死者と無意識—異界交渉技術としての能動的想像法—

葛西賢太¹

2010年9月4日

日本宗教学会学術大会（東洋大学）

母方の祖父の絵がありました。祖父は司教のような地位にあり、家から出てきたところのちよつとしたテラスに立っているところが描かれておりました。……私は椅子にひざまずいて、祖父が階段を降りてくるまでじっと絵を見つめていました。 『分析心理学』277頁

I はじめに

分析心理学を創始したC・G・ユングは、言語連想法や夢分析と並んで、能動的想像法 **Active Imagination** という技法を提唱していた。能動的想像法は「無意識と対話する方法」であり、ユングはこれを通じて、それまでの人生で十分達成できなかった無意識にある別の側面（影あるいは劣等機能）を認識し、人格の統合を図ることによる個性化という心理的成長を構想していた（「超越機能」）。ところで、能動的想像法とは、死者と交渉する降霊術の実践とも近い形態を持つ。能動的想像法を介して、生者と死者との関わりはユングにおいてどのようにとらえられるのか、また、この技法を通じてユングが提示する共同性はどのようなものかを考えたい。

II 能動的想像法とは

II-1 能動的想像法を生みだしたユングの体験

能動的想像法とは、ユングがフロイトとの訣別以降の危機を乗り切る過程で（再）発見された、無意識と対峙するための技法である。したがって、最初にユング自身の体験を述べ、次にユングによって整理されたこの技法についての説明を見よう。

1913年の10月頃、ユングは、ヨーロッパが破壊されて、洪水におおわれ、それが血に転じるという不気味な幻視を何度か体験した。また1914年の春と初夏には、北極から寒波が下ってきて、ヨーロッパの土地をすっかり凍らせ、草木は枯れ、人は誰もいなくなるという夢をみた。この年の8月1日、第一次世界大戦が始まり、彼は自分の幻視が予知夢であったと知る。この予知夢がどうして生じたのか、自分の無意識が人類的な歴史経験とどうつながっているのかを探らなければと彼は痛感した。そして彼は、空想を書き留めた。無意識から出てくる強烈なイメージに圧倒されながら、それらを一つ一つ受容していったという²。ユングはその後も、聖書に登場するフィレモンとサロメといった、さまざまな神聖な人物像に出会う体験をする。これらの人物は、歴史的で静的な人物像などではなく、むしろ動的で、ユングに対してさまざまな具体的な行為を迫る相手であった。

空想を書き留めながら、自分は何をしているのかとユングが自問すると、彼の内面から知人女性（生者）の声で返事がある。この声に対して疑問や反発を感じながら彼が空想を書き続けていると、突き上げられるような感じがあり、再度声が出た。ユングはこの女性と対話しようとしたが反応がない。ふと思い立って、“私の内面にいるこの女性

¹ 宗教情報センター (<http://www.circam.jp>)。E-mail: ktkasai@nifty.com。

² 『自伝』1、251-264頁。

には発声器官がないのだから、私のを使えばよい”と勧めた。彼女はユングの声を使って弁じはじめ、ユングは自分の声で反論して、長い時間議論が続いた³。

自分とは別の主体に自分の発声器官を貸して語らせ、それと討論するというのは、霊媒や神秘家が、神秘体験の中で神霊に出会い、神霊が彼らの身体を借りて語り、討論してその正体を見極める、ということとよく似ていることに注意されたい。

以上に見るように、能動的想像とは、神話的な象徴についてより深く学ぶことによって、植物のように静的な無意識がより深く理解される、というようなおとなしい探究ではない。むしろ、おどろおどろしい死者の霊をさえ思わせるような、生命を持った元型（のイメージ）と、折衝 *Auseinandersetzung* して張り合う、ダイナミックで能動的な過程だとされる。

II-2 能動的想像法とは

ユングは能動的想像法のやり方として、批判的な注意力を排除して、意識の中に空白を作り出し、そして、心の中に浮かんだ特定の対象が、自然に活動するのを待つように説く。対象としては、実在の人物では現実には縛られてしまうので、絵画や彫像、あるいは石などの静物がよいとユングは勧める。たとえば、気になる石があればそれを思い浮かべ、現状が壁に直面しているように感じられればその壁を思い浮かべて注視し（リビドーを注ぎ）、それらが動いたり語ったりするのを待つ。すると、視覚型の人にはビジョンが、聴覚型の人には内界から声が聞こえる。プランシエツトや自動筆記などの降霊術的な道具や方法をも用いて、意識を活性化するように促される。ユングは、霊媒や神秘家、舞踏家や芸術家が用いた心身を活性化させるあらゆる方法を用いてよい、と述べる。また、能動的想像法の内容は描写するようすすめられる。文章、絵画、音楽、舞踏などさまざまな形に、才能があれば塑像や彫刻などに。これらは表現により意識を活性化すると同時に、記録としてさらなる想像を触発する。そこで対象から伝えられたことや受け取ったことを実行するように努力する。

無意識の動きに合わせることのいっぽうで、受動的に“なんとなく”流されるのではなく、能動的に無意識と折衝することが同時に重視される。無意識は自我にとって一人の他者に等しい。この他者の声を紙に書き留め、その言い分に自我の立場から努力を惜しまず真摯に応えつつも、自我が主導権を握りつつ徹底して対話しなければならないという。折衝によって、無意識と意識を、よりよい統合へと至らしめる、超越機能を働かせることができるとユングは考える⁴。この能動的態度をもって、能動的想像法は夢や霊媒の降霊術と区別されるという。

能動的想像法の記録を素材に分析家とのセッションが行われる。分析家は、能動的想像法の同伴者として、神話や象徴についての知識を駆使して、無意識との折衝を支援する存在である。個性化というゴールは、無意識への完全な譲歩でも、無意識の完全な征服でもなく、自我が否定してきた影の側面が認識されることを通じて達成される。

II-3 能動的想像法と降霊術

ところで、他者に自分の声を使わせて語らせ、その他者と討論するとは、霊媒が死者

³彼はこの女性を、男性の無意識の中で女性的な役割を演じる像として、アニマと呼んだ。『自伝』1、265-266頁。

⁴「超越機能」、122-148頁。

の霊を自らに憑依させて、死者の霊に語らせるという降霊術に酷似した形態である⁵。ユングは、霊媒である従妹を症例とした学位論文をまとめている。分析心理学は、降霊術を素材とした概念構築であるとの指摘は多くなされている。とすれば、能動的想像法は霊媒の技法の再発見なのだろうか。

一方ユングは、能動的想像法は自我の能動的関与という点で、死者の霊に自らをゆだねる降霊術とは異なるという。だが降霊術に酷似した実践が、自我の能動的関与をもって降霊術と区別されるとは、特殊なとらえ方だ。ユングはどのように降霊術を捉え、またどのように死者を捉えたのか。私たちはこの酷似をどのように捉えるべきか。

Ⅲ 死者の無知と無力

ユングの『自伝』には「死後の生活」という一章があり、そこでユング自身が体験した故人との再会体験や、それを踏まえた彼の死後生観に触れることができる。この章を特徴付けるのは、死者はこの世界のことを生者以上に知ってはいないという彼の見解である。

伝統的な考えに従うと、死者は偉大な知識の所有者であるはずだ……しかしながら、死者の魂は彼らが死んだときに知っていたことのみを「知っており」、それ以上のことは知らないようである。……彼らは全能の科学、——あるいは私は全能の意識と呼びたいが——を自由に駆使しているのではなくて、生者の心の中に、つまり、肉体と結びつけられた魂の中にはいりこんでくることができるだけのように思われる。従って、生者の心は死者のそれよりも、少なくともひとつの点で優っている。すなわち、明確で決定的な認知を達成せる能力の点である。私のみるところでは、時間、空間における三次元の世界は一種の座標軸のシステムのようなものである。⁶

死者は、この世界の現在について、過去や未来について、膨大な知識を所有していると、降霊術信奉者たちには信じられており、降霊会では霊媒にこの世界や他界についてさまざまなことを尋ねる実践が行われている。しかし、ユングは、むしろ死者（＝靈魂＝心）は生者の肉体を通してしかこの世について知ることができないと述べる。霊媒を通して死者から生者以上の知識が得られると信じる人たちを批判するかのようである。生者の肉体の中に閉じ込められることは靈魂（＝心）にとっていっけん不自由に思えるが、三次元の肉体の中に収まることでこの世界を認識するための座標軸を得るということだとする。そのいっぽう、死者は無時間の相対性の中に置かれているので、ものごとの終止や発展があり得ないのだとユングは説明する。

たとえば、ユングの弟子であった60歳の女性が他界する2ヶ月前に見た夢は、死後の世界で古い友人たちが待っていて、彼女にこの世の最新の知識を乞うというものであった。1922年9月にユングが体験したのは、ユングが心理学者であるので「結婚の心理について相談したい」と亡父が訪ねてくる夢を見て、ほどなくしてユングの母親が他界するという出来事だった。他界において母親と結婚生活を再開するにあたり、生者の心理学者の息子に助言を求めたのだと、ユングは解釈する⁷。『死者への七つの説教』（1916年）では、キリスト教徒の死者が、世界の真実について生者であるユングに問

⁵ 分析家の位置は、霊媒よりやや上位にある審神者を想起させる。欧米のスピリチュアリズムには審神者は存在しないが。

⁶ 『自伝』2、149-150頁。

⁷ 前掲書、154-159頁。

うために大挙して訪問し、キリスト教ではなくグノーシス思想による答えを得て満足して去ってゆく。

死者は身体を持たないがゆえに生者を介してしか具現できず、また認識のための座標軸を持たないために限られた知しか持たず、無時間の世界にいるゆえに発展もないまま、死の時点の記憶しか持たない。このような、不便で限定的な状況に置かれたものとしての死者の描写は、無意識を形容する彼の描写と一致する。踏み込んでいえば、ユングにおいて個々の死者とは無意識の中のコンプレックス「にすぎない」のだ。かといって、では生者が無条件に死者に優るというのでもない。自然の中に埋め込まれた無限の事実の認識は、無意識と能動的に対峙する経験を重ね、限定状況におかれた死者に生命を吹き込む力を持った、個性化した意識において可能になると、ユングは考える。

IV 能動的想像法は実践者と誰をつなぐか

能動的想像法は、無意識の内側にある他者と出会わせる、「倫理的」技法である。実践にあたっては、分析家が同伴者となり、能動的想像を解釈し導いてくれる他者ともなる。能動的想像法の実践者は、仕事や恋愛、結婚など、人生上の重要な課題と同時進行で取り組み、それらの課題についての象徴的な示唆を得て社会関係を再構築する。

一方、このような能動的想像法は、堀江が死生観・他界観の心理化・私事化と呼んでいるものの一つの例とも考えられる。能動的想像法自体が私的な実践である。ユングにおける死者は、無意識のコンプレックスであり、心という「一つの世界」からでることはできない。能動的想像法などの技法を通じて認識されることにより、死者ははじめて生者にとって意味を持つ。ユングのセミナーを受けていた人々は、セミナーの場で、ユング的な異界との交渉を共有したであろうが、それは少人数のサークルであった。能動的想像法は、異界と交渉しながらも、異界を含んだ他者との共同性を縮減するものでもあったと考えられる。

降霊術と近い形態をもった能動的想像法を、ユングは能動性の有無をもって峻別しようとする。しかし、能動的想像法についての記録が分析家やユング派のサークルの間の閲覧のみにとどめられたことは、この技法が降霊術と分けにくいものであることを推察させる。このような異界交渉技術の心理療法的位置づけは、その後のさまざまな「スピリチュアル」な実践の中でも通有されている。ここには、心理療法の実践と宗教実践とを結ぶ興味深い素材が豊かにあると思われる。

本報告は鶴岡賀雄・深澤英隆編『スピリチュアリティの源流』リトン、近刊、所収の拙稿と内容の重なる部分があることをお断りしておく。

Jung, C.G. 1997 *Jung on Active Imagination: Key Readings selected and introduced by Joan Chodorow*, Routledge.

Jung, C.G. 1997 *Visions: Notes of the Seminar given in 1930-1934*, Princeton University Press.

Miller, Jeffrey C. 2004 *The transcendent Function: Jung's Model of Psychological Growth through Dialogue with the Unconscious*, State University of New York Press.

チャレット、F.X. 1993 『ユングとスピリチュアリズム』渡辺、葛西、堀江、高橋訳、第三文明社。

ノル、R. 1998 『ユング・カルト——カリスマ的運動の軌跡』、月森左知・高田有現訳、新評論。

ノル、R. 1999 『ユングという名の〈神〉——秘められた生と教義』老松克博訳、新曜社。

ハナー、B. 2000 『アクティヴ・イマジネーションの世界——内なるたましいとの出会い』老松・角野訳、創元社。

ユング、C.G. 1996 「超越機能」、松代訳『創造する無意識——ユングの文芸論』平凡社ライブラリー。

ユング、C.G.、A.ヤッフェ編 1972, 1973 『ユング自伝』河合他訳、1、2、みすず書房。

葛西賢太 2010 「死者を代弁して語ること」『死生学年報 2010』リトン、東洋英和女子大学死生学研究所。

渡辺学 1991 『ユングにおける心と体験世界』春秋社。

老松克博 2000 『アクティヴ・イマジネーション——ユング派最強の技法の誕生と展開』誠信書房。